Ａｒｋ［→ｓｉｄｅ：Ａ→］

元木悠世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｒｋ［↓ｓｉｄｅ：Ａ↓］

【Ｎコード】
Ｎ８０７７Ｂ

【作者名】
元木悠世

【あらすじ】
少女はいったい何者なのか。その正体は自分すらもわからない。
走る少年。追いかける少女。うごめく影。その真意は誰も知らない。

プロローグ

辺りは酷く寒かった。

月夜に照らされ見渡す限りの雪は、人を魅了する銀世界と化し光り輝いていた。辺りには風も吹き荒れ、木々はざわざわとお互いの葉が擦(こす)れ合いざわついている。降り積もったばかりの雪が辺りを吹き荒れる風にいざなわれ漆黒の夜空へと舞い上げられた。舞い上がった雪は漆黒の夜空の中で月夜に照らされ今一番の輝きを身に纏(まと)い、放つ。ダイヤモンドと化した雪は地面に降り積もる雪と一緒に輝き瞬いた。美しく幻想的な世界が今ここにあった。

そこに影が二つ。

月見る少女と銃を持つ男。

場にそぐわない二人。

それは距離にしてたった一メートル程度。

銃を突きつけられている少女に脅えている様子は見られない。じっと月を見つめていた。だいたい七，八歳程度の少女は少し大きめのフリルの付いた白い七分袖のワンピースを身に纏っていた。それは見るからに寒そうで、この点においてもとても少女が寒そうで場にはそぐわない。しかし、少女はやはり寒そうでなかった。もうひとつ、少女の着る白いワンピースは血と思われる鮮やかな色合いの赤色に染まっていた。それは少女の血か、他人の血かは不明のまま。しかし、もしその血が少女のものだとしたら少女の生はもう長くはないだろう。

「……こ、これで終わりだな……」

男の声は震えている。それは明らかに少女に対する恐怖心からくるものだと感じられる。大の大人が少女に恐怖する場面なんてあるのだろうかと思うが、実際にその光景は目の前で繰り広げられていた。

男の持つ銃が震える。対して少女はその”人間”を殺すための凶

器を向けられている状態でも笑っていた。その笑い方はまるで何も知らないかのような純粋で。真っ白で。

「おじさん？　誰？　それは何？」

ひぃっと男は驚く。ささいな少女の発言。その男の行動に少女も驚いた。

「お、おじさん？」

男は無視をした。そう、少女の命はもう長くない。自分が殺さずとも出血多量で死ぬに違いない。しかし、自分が課せられた使命はその自分の目の前にいる少女の完璧な死。そうだから自分はこんな少女の状況でも自分は撃たなければいけない。銃を。少女に。

せめて、痛くなく苦しくない死を迎えさせてあげよう。それが自分にできる少女にできる最高の……。

男はトリガーに指をかけた。銃口を少女に向ける。

息を。

一回。二回。

――三回。

呼吸する。

――よし

トリガーを引いた。無機質な銃声が一発、辺りに響いた。

時が。止まった。本当に？　わからない。永遠に？　それもわからない。

「ぐ……はぁぁぁ」

ドシャリと雪のつぶれる音。倒れたのは男だった。あっけない男の死。真っ白で純白な雪は男の血を吸い込み、取り込み。赤く。赤く。赤く。

それを見る少女の目にはこの光景がどう映ったのだろうか。さすがに少女の顔から、笑顔が消えた。そして少女は……

Phase：1

青い空が広がっていた。澄み渡る青い空はどこまで続いていて終わりがない。終わりがないわけではないが終わると同時に最初の場所に戻ってくる。それを終わりと言って言いならば終わりはあると言っても言いだろう。

今の時間はだいたい四時をちょっとだけ過ぎたところだった。

籠林悠祐は友達との会話に花を咲かせ、楽しんでいるところだった。

五月上旬。南袱紗第三高等学校の一年である悠祐は友達らしき人がようやくできてきた。高校に入って初めてできた友達が女子というのはある意味ですごい。普通は男子の友達と会話を重ね、相性、雰囲気などを考えながらこの人なら友達としてやっていけそうと自分が思うなら大体、相手もそう思っているものである。そしてグループになっていくのである。

しかし、悠祐はほとんどの順序をふっ飛ばし、むしろ吹っ飛ばされた形でその女子と友達になった。そのおかげで男子とも何人か友達ができたわけで、まぁ結果オーライというやつである。

なぜ、このような経緯になったのか知るためには、時を一週間遡らなければならない。

雷も唸る非常に雨の強い日ことだった。

悠祐は一人窓の外を仰いでいた。たまに光がやってきてその後を追いかけるかのように音が鳴る。そう、雷は止む気配がなかった。同じく、雨も。強く降っている。

そういう日はたいてい憂鬱になるものである。案の定、悠介もその一人である。「はぁ」と窓に向って溜息を吐いている。
その時だった。ガラガラっと音をたてて教室のドアが開いていく。その先には一つの人影があった。雷が鳴る。白と黒のコントラスト。それは不気味で。怖い。そう、悠介は感じた。次の瞬間までは…。
「はぅ…」そう言ってその不気味で怖い影が明らかに外見にそぐわない声をあげる。目が合った。刹那。数秒。数分。数時間。それは永遠にも感じた。けどきっとその永遠は刹那の時間しかたっていないのだろう。
そうしてすぐに影が悠祐の存在に気づいた。
「お、おま……いつからそこに！？」
いつからだろうかそんなことを考えてもなかった。
「さあね」
沈黙が続く。初めてこのクラスの人と会話をした瞬間だった。
「お前、しゃべれ、あぅ……」
少女が話している瞬間に雷が鳴り、うろたえた。どうやら彼女は雷が苦手らしい。それはほんとに些細な無駄知識だった。テストに出るなら覚えてやっててもいいが、あいにくというか絶対にテストなんかに出るわけがない。
「俺だって人間だ。しゃべってもおかしくはないだろう？　あと一つ、君名前は？」
まったくと言っていいほど知らない顔だった。見たことあるだろ？　とこ言われれば見たことなくないような気がしなくもないが、いたのだろうかこんなやつ。悠介の記憶では初見（しょけん）だった。
「僕の名前か？」
僕？　っと思ったがあえてそこのは突っ込まず聞き逃した。
「僕の名前はまりーあんとわねっと？」
「俺に聞くな！　つか、絶対違うだろ！」
「え！？　なんでばれたの？　もしかして君……」
「……な、なんだよ」

沈黙が流れる。悠祐は少女に冷たい視線で見られる。その視線は冷たいというより疑いの目。冷酷だった。

一秒。二秒。

――三秒。

少女が口を開いた。

「もしかして僕のストーカー？」

「んなわけねーだろ！！」

ものすごく真面目な顔で少女が平然と言ったので悠祐はたまらず噴き出した。「な、何笑ってるんだよ！」と少女は反論してくるが、普通にこいつは馬鹿だと思う。いや、きっとただの馬鹿ではない。そう、こいつは大馬鹿に違いない。

「で、君の本当の名前は？」

悠祐は明後日の方向に向きかけていた話題に軌道修正をかけ、戻す。

「君君君君うるさいなーお前は」

―誰のせいだよ……まったく

この少女は自分だと思っていないのだろう。その顔に悪気という二文字はなさそうだった。

「僕の名前は……はぅ」

そこでまた雷が邪魔をした。耳を塞ぎ、体は震え、少女は雷に怯えている。未だに立ち上がりそうな気配はない。

―いつになったら名前聞けるんだよ……

「はぁ」っと小さくため息を吐いた。

Phase：2

あれから空は分厚い雲に覆われ晴れる様子はなかった。二十分が経過した今でも目の前の少女は雷の恐怖と闘っていた。雷が鳴るたびに体を震わせている。それでも少女も帰るつもりはないのか特に何かするわけでもなく少女は自分の椅子に座っていた。そしてまだ悠祐はまだ少女の名前を聞けずにいた。不意に少女が沈黙を破り悠祐にしゃべりかけた。

「お前、なんか話題ないのかよ……こう静かだとなんか……不快だ」

そのお前っていうことに悠祐は腹を立て反論する。

「その前に、お前って言うな！　俺には籠林悠祐っていう名前がちゃんとあるんだよ」

「知ってるよ。じゃあ悠祐クン、僕の名前思い出した？」

思い出すも何も悠祐はこの少女の名前など知らない。だからさっきから聞いているのではないか、とか思うが悠祐はそれは口にはしなかった。

「そもそも、君の存在に気づいたのは今日が最初。名前なんて知るわけないだろ」

考えた結果だった。少女は傷ついただろうか、しかし、事実だ。しょうがない。

「やっぱり、覚えてないか……」

最後の方は尻下がりでよく聞こえなかった。そこに雷が鳴った。だけど今回少女は驚くこともなく、平然としていた。さっきまではたんなる演技だったのか、それとも今の少女はそれほどまで放心状態なのかどちらかであるのだが、どちらかというならば後者が正しいかもしれない。今の少女は心ここにあらずという感じであった。

少しではあったが沈黙の後、少女はまたしゃべりだした。さっきよりもトーンは落ちていた。

「君はね、昔、僕と結婚する約束をしたんだよ。覚えてないよね…

…言われた時ほんとに嬉しかった。幼稚園の時だったけどね」
―幼稚園？
「僕だけ覚えてるなんて淋しいな、恥ずかしいし、なんだか僕馬鹿みたい」
そう少女が告げると下を向いて俯(うつむ)いた。
悠祐の幼稚園の記憶は……乏しい。というかむしろないといっても過言ではない。しかしこの少女は覚えていた。その記憶力は人間離れしている。それとも悠祐との愛がそれほど深かった証なのか……。しかし悠祐は覚えていなかった。
「ごめん、やっぱり俺……」
そう言うしかなかった。少女は余計に悲しくなるだろうか、そう考えると心の奥が少し痛む。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。心の奥で反芻する。
「いいよ、大丈夫、気にしてないからー」
少女が言うがその顔が嘘だと物語っていた。少女は悠祐と目を合わせようとしない。それは明らかに避けていた。空を仰ぎ、教室をぐるりと見回す。その間も間違って悠祐を見てしまわないように考えているのか絶対に目は合わない。言いようのない空気が辺りを包み、重苦しいことこの上ない。できれば、このまま逃げ出したいが、明日、明後日と目を合わせるクラスメートだ。できるわけがなかった。
その重苦しい空気を断ち切ったのは、少女だった。
「じゃあ改めて僕の名前は……」
悠祐は生唾を飲んだ。時間はゆっくりと動いているのか？　時計を見るが、カチッカチッといつものように一定だった。
何秒たったか。
正確にはわからないけど多分五秒足らず。本当に？　多分。そう、確信なんて……ない。

「ふぅ」と少女が一拍置くために息を吐いた。それと同時に少女の肩まで方まである髪の毛が揺れた。　いや、流れた。落ち着いた、澄んだ声が静かな教室に響いた。

「そう、僕の名前は惟神紋乃（いがみあやの）」

悠祐はどこかに懐かしさを感じた。

Phase：3

雷を鳴らす雲がどこかへ消えたのか今は横殴りの雨の音だけが教室に響く。雨が横殴りだということは風が相当強いってことなのだろうか、まったくもって帰りたくない状況であった。

「あ、あのさ……」

沈黙を破るように悠祐は惟神に声をかけた。声だけで反応した惟神は顔をこちらには向けていない。

「ん？」

「やっぱり怒ってる？」

「別に怒ってないよ！！」

―やっぱり怒ってる

顔をこちらに向けていなくても何となく想像できるのはそれほど惟神の声が脅迫めいていたからだ。

カリカリ音がした。惟神が勉強し始めたのだ。何を勉強しているのか悠祐のところからはわからないが何かをしていた。

悠祐の席は窓側の後ろから二番目の位置で惟神の席は六列ある中の右から三番目の前から三番目、距離からしても見えないがその上悠祐のところから見えるのは惟神の後姿だけである。

悠祐は惟神をちらっと見た。それだけなのに悪寒を感じた。俺はきっと殺されると思い身震いした。男なのに情けない。

「そういえばなんで悠祐クンは帰らないの？　傘がないわけじゃないでしょ？　もう六時前だし」

「あ、いやまーそうなんだけど……」

しどろもどろになりながらも悠祐は言葉を紡ぐ。帰るタイミングを失った、とか、君が怖くて帰れない、とか口が裂けても言えないこの気持ちを悟られないように。そしてなるべく怒らせないように。

それがこの結果である。

「中途半端だ……」

気付かないうちに声が漏れた。小さいから惟神には聞こえてないはずである。なにしろ距離も結構あるのだ。
「なんか言った？」
撃沈。
「いや、じゃあなんで惟神さんは帰らないの？」
「さっきの会話からわかるでしょ？　僕には傘がないんだよ」
「あーじゃあ雨が降ってなければ…」
「そりゃ帰るさ。学校にいてもつまらないし、何しろムカつく」
「うっ……」
言葉に詰まった。この会話中惟神がこちらを向かなかった。やっぱりこの怒りの元凶は。
―俺だ
今度はちゃんと口には出さずにすんだ。けど沈黙が、何か言わなくてはいけないと悠祐は思い、焦った。
「じゃあ、一緒に帰ります？」
「えっ？」
惟神が悠祐の方を向いた。
―何言ってるんだぁぁぁあああああああ！
今更訂正できるわけがなかった。さっきまで惟神から感じていた悪寒は一変して希望へとなり変っている。ここまできたら自棄（やけ）だ。なるべくの家の方向が分かれることにかける。もうそれしかなかった。
「家どっちの方？」
「悠祐クンの家の十メートル付近だよ？　それすらも覚えてないの？」
惟神はぷぅと口を膨らませ怒っているんだぞ的な意思表示をしている。しかし、そんなもの悠祐の視界に入っていても悠祐の心はすでに体から離れてしまっていた。
「さよなら、僕の人生」「さっさと行くぞ！！」
声が重なった。悠祐の声は惟神の声にかき消されて聞こえなかっ

た。

そして二人は教室を後にした。惟神が悠祐の傘を右手にしっかり持っていた。

Phase：4

惟神は昇降口を出て空を見るなり「なんだ、雨止んでるしー」と言った。

その言葉通り雨は止んでいた。悠祐は内心ホッとしていた。惟神は何か不服なのかちょっとご機嫌斜めである。

夜だから雲の隙間から太陽の日が差すということはないが、浴びれるものならなんとなく浴びたかった。気分的に。そんな感じだ。ほかに理由などない。

「ほんとだ、傘いらないね」

こっちを見るなり惟神はぷくっと膨れてみせた。

夜だからといって袱紗市は何も変わらない。都会に行けば怪しげなネオンが光っていたりと危なげな感じを醸し出しているのかもしれないが、ここ袱紗市は特に発展してるわけでもないが、ド田舎というわけでもない。

ここ南袱紗第三高校は袱紗駅に対して南口にできている。ここ最近大型量販店が南口に進出してきたこともあって駅近くにはそれに便乗するように少しづつ増え始めてきていた。高層ビルも都会ほど高いわけではないがある。そんなこんなで南口は少しではあるが賑わいを見せていた。

「行くよ！！」

何を怒っているのだろうか、悠祐が思う限りこの少女は気付けば怒っているような気がする。半ば強引であるが、先を行く惟神に遅れないように悠祐も少し早足で追いかけていく。その姿は半ば微笑ましく、どこか……。

それから三十分。

時刻は十九時二十八分。

それはなんの前触れなく。

やってきた。

惟神は空を見上げ呟いた。

「雪？」

それに続いて、後を歩いていた悠祐も見上げる。

「季節はずれも程があるなー」

それはどこからどう見ても雪であり、雪でしかなかった。

雪。それは真白であり、純白で汚れない。そう、本当ならその説明で合っているはずである。しかし、今ここに降る雪は白から赤へと色を変えた。

「ふぇ！？」「なんだ！？」

相応の反応だった。誰もが空から降る赤い雪には驚きを隠せないだろう。二人の反応は人間代表の反応と言ってもいいだろう。

赤い雪を見た惟神は「傘！！　傘！！」と催促すると悠祐が右手に持っていた傘を前に差し出した。それをすばやく受け取ると、いや奪い取ると傘はバサッと開いた。

すばやく悠祐はその傘の中に入った。すると、すぐに惟神は言った。

「ちょっ、なんで入ってくるのよ！！」

「なんでって、これ俺の傘だろがー」

「僕が差したんだから、今は僕のだ！！」

「んな、むちゃくちゃな……」
こんな気味悪い雪になど触れたくもない。触れてしまったら全てが崩れるそんな気がした。しかし、悠祐の傘は小さかった。肩と肩の触れ合いがなければ二人は傘には収まりきれない、そして些細な口論をしている二人。この状況を見て誰がこの状況を正確に把握できる人がいるだろうか、いるはずがなかった。
「お二人は仲がいいのですね、羨ましい限りです」
話しかけてきたのは傘を差した二十歳くらいの女の人だった。ブロンズの髪の毛は肩を越えそうなくらいに伸ばしている。五月というのに女の人は厚手のパーカーを着ていた。その女の人はその手には傘を持っていた。これから駅にでも行って彼氏を迎えに行くのであろうか、そんなことを悠祐は考えるが答えは聞けない。
この状況の判断のし間違いにいち早く反論したのは惟神だった。
「だ、誰がこんな奴なんかと、僕はこんな奴など知らないぞ！！」
―そんなに否定しなくても……
こんなはっきり否定されるとたとえ気がないとしてもさすがに堪えるものだと悠祐は知った。
その惟神の反応をどう勘違いしたのか、それともわざとなのか、ただの天然なのか目の前にいる二十歳くらいの女の人は「仲がいいのね」と言って微笑んでいた。惟神の顔は赤くなっていた。悠祐が左を見た時、惟神は右を見て。二人は目が合った。「こんなやつと？」と惟神は呟いた。悠祐も同意するように「俺も同じ意見だ」と言ったら惟神は悠祐の腹をつねった。それが痛くて「うぐぁ」と悠祐は呻いた。なんでと不思議に感じながら悠祐は考えていたらさっきの顔とは裏腹に女の人が真剣な面持ちで言った。
「それにしても変よねー」
「何がですか？」
知らずに悠祐は下手になる。その下手に出た反応が惟神も不思議に思ったのか視線は左から悠祐はすごく感じたが、決して向こうとは思わなかった。向いてしまったら今度は何をされるかわからない

恐怖から悠祐は自己防衛に走ったのだった。
「だってこんな気温で雪なんか降らないでしょ？　ましてはこんな鮮やかな赤い雪、私生まれて初めて見たよ。こんな気味の悪い雪。気分が悪くなるわね」
　そういえばそうだと感じざる得ない部分も多い。気温自体は五月上旬の気温である。そう、それは雪が降る気温でないことは理論的に証明できるはずだ。むしろ、雪の降ることができる気温はたしか0℃くらいである。もちろん、今はそんな寒いわけがない。
「確かに、言われてみれば……」
「何かが、起きるかもしれないわね……」
「何が起きるんですか？」
「わかりなさいよ、それは絶対に悪いことよ！！」
　今日一番の不服顔で惟神はいけしゃあしゃあで言った。

　それから赤い雪は五分程で止んだ。それは降り積もることもなく、跡形もなく消えていた。その赤い雪の鮮やかさゆえに夢、幻想だったのではないかという人もいる。しかし、あれは決して夢、幻想ではない。そう、実際に存在していたのだった。

　この雪は後日報道された。
　雪は袱紗市のみで降ったようで他の市では降らなかったらしい。
　そしてその赤い雪を見た人は五万四千人だという。

「君たちそういえば名前は？」
　別れ際に二十歳くらいの女の人が言って続けた。
「こんな風に会うのも何かの縁かもしれないしね」
「僕は惟神紋乃」「籠林悠祐です」
　二人の声は重なった。女の人まで届いたのかどうかと少し不安に

悠祐はなった。が、不要な心配だったようだ。
「やっぱり、貴方達仲が良いのね」と女の人は呟いた。その表情は綻んでいた。
「私の名前は……」

Phase：5

あの赤い雪の後は特に変わったことなどなかった。そう感じていた。ニュースでは赤い雪のことを空の涙と言い、評論家は嘘か誠かあの奇妙極まりないあの現象を一種の自然現象でしょうとか、ほざいている。あの日、あの時、袱紗市で起きたことを自ら目の当たりさえすればあれを一種の自然現象と言えるか？　言えるわけがない。だってあれは何かこの世にはない不吉を持っている気がした。きっとあれはこれから何かが起きるという前兆だ。じゃあ何かとは何だろう。それがわかれば苦労はしないんだけど。

女の人に会ってから一週間がたとうとしていた。今目の前にはいつもと変わらず籠林が男子と会話に花咲かせているが、紋乃は一週間目のことがどうしても忘れられなかった。たまには物思いにふけていたら友達に「具合悪いの？　保健室行く？」と言われてしまった。やはり紋乃には考えている姿は合わないのだろう。どちらかといえば活発な方であったが、あの日から少しいつもと違う。籠林からは「心配のし過ぎだよ」とか言われる始末。

あれが普通なのかと思ってしまうがあれを心配しない方がおかしいのではないかと思う。だから、籠林はおかしいのである。そうこうしているうちにまた紋乃は考え事していることに気がついた。

「あれを割り切れるかっつーの」

誰に言うでもなくそう言うが、籠林がこっちを向いたような気が

する。気がついた？　いや、気のせいか、依然として籠林は友達と会話をしいるし、きっと気のせいに違いない。
あれから籠林は変わったと思う。友達なんかと話すやつじゃなかったのに今は放課後だというのにも関わらず話をしている。一週間前からは決して想像できない光景だが、一週間前の出来事をこのクラスメート一人が見ていたらしく。問い詰められたりしているうちに友達になっていたという。なんとも面白い友達の出来事である。もう笑うしかない。
視線を感じた。その視線を感じた先には確か籠林がいたはずである。会話が終わったのかと思い、少し愚痴るように言った。
「遅いぞ、もう少し……は？」
目が合った。明らかに籠林ではなかった。というか、性別上、男ではない女だ。
「え？　大丈夫？　気分悪そうだったから」
―またこれか……
そうは思うが、今日は人間違いを引き起こしている。恥ずかしくて顔が見れなかった。というか、目を合わせたら笑われてそうで見たくない。
「けど、大丈夫そうね」
と笑って見せた。彼女はかわいらしいと思う。少し幼い気もするが、スタイルといい笑顔といい文句のつけようがなかった。むしろずっと、見ていたい笑顔である。ずっと見ていても飽きない自信がある。それくらい彼女は可愛らしいのだ。
笑いを残し立ち去ろうとしていたところを呼び止めた。
「埼京さん、ありがとね」
「埼京さんなんて、私のことは希紗那で良いわよ」
「ありがと、さいきょ…」
―埼京？
「そのうちなれるわ」
と言って笑って見せた。それにつられて笑うが紋乃は表面上の笑

いだけだった。本心は笑っていない。それは一つの疑問に行き着いたからだ。

埼京。

あの一週間前の女の人の名前。

『私の名前は……』

そこで女の人は一度天を見上げた。何かあるわけではなかった。さっきまで雨が降っていたのである。紋乃の嫌いな雷も鳴っていた。そう、だからあるといえば重苦しい雲だけである。だけどもその時は夜であったから雲もあるような気がすればないような気がしなくもないが、見えるのは闇いっぱいの夜空だけであった。

そう、一拍置くなり女の人はこう言ったのだ。

『埼京響子よ、じゃあ今日は人待たせてるから、またね』

そうして後姿がだんだんと小さくなって最後は消えたのだ。見えなくなっただけではあるのだが、あの光景は消えるといった方が当てはまるだけのことだ。

紋乃は響子のことを好きにはなれなかった。これが生理的には受け付けないというのか。紋乃にとって初めての感覚だった。

あの赤い雪に負けず劣らず奇妙な感じを拭えなかった。どうして、とか、なんで、とか自分なりの答えを出そうと思っても決して出る

ことはなかった。だかｒ籠林に聞いてみたのだが「そう？　かわいいと思ったけどなー」って会話になってないじゃねかーとか叫びたくなったが、あえてそこは口には出さず心にとどめて置いたが、いつ爆発するともわからないが。結局は答えに行き着くことはできなかったのだが。けども、今ならわかるかも知れない。心の奥底で眠る何かを希紗那は答えを知らずともヒントを持っているのではないか。そのヒントを使えばこの難解極まりないこの何かを解き明かしてくれるのではいかと期待をしている自分がいることに紋乃は気がついた。

埼京という苗字。袱紗市全体を探したところで数などたかが知れている数にすぎないだろう。じゃあもし、知っていたらどうするのか。その先を考えるならば、希紗那の気に障らない程度に聞き出してみる。希紗那を利用しているみたいでちょっとは悪い気もするが、今回だけだ。人を利用するのはと考えるが、今日だけと割り切る。

「あのさー、埼京響子って人知ってる？」

あからさまに希紗那の顔がみるみるうちに悪くなっていく。反応からして知っているには違いないのだが、希紗那は紋乃のことをなんで知ってるの的な顔で見つめている、いや睨んでいた。しかし、ここまで言ってしまったのだ。もう紋乃も後に引くことなどできなかった。むしろ、この状況下ではぐらかしてしまえばもっと状況が悪くなっていくような気がした。というか悪くなるであろう。

希紗那は無言だった。どうしたの？　とか言いたい気持ちになったが状況が状況だけにやすやすとは発言できなかった。そのなんとも言えない雰囲気が紋乃にとってやるせなかったが、きっと今は耐えるしかない気がしていたのでじっと黙っていた。

時間が遅くなるにつれて放課後の団欒を楽しんでいたクラスメートも少なくなっていった。

十七時三分

沈黙を断ち切るように希紗那は話した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8077b/

Ａｒｋ［→ｓｉｄｅ：Ａ→］

2010年10月27日07時50分発行